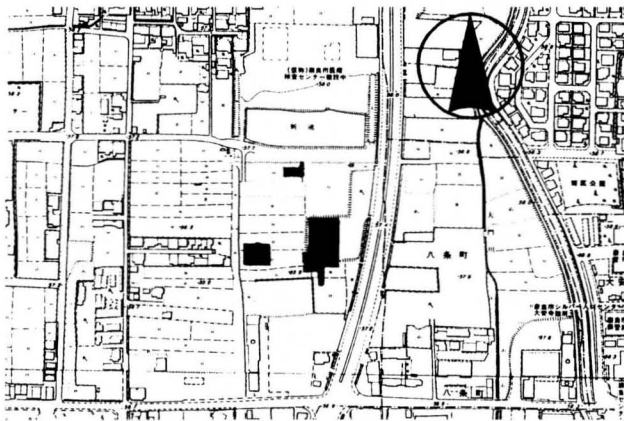


じんぐうかいほう いがた ちゅうぞう 神功開寶の鑄型と鑄造関連遺物

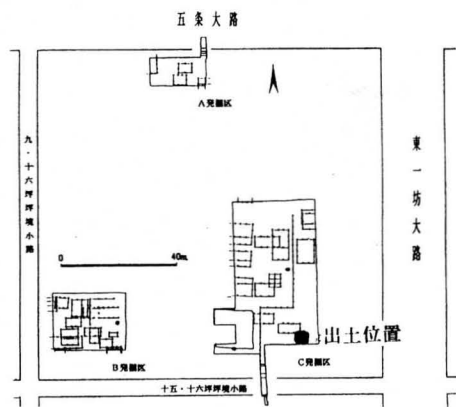
平城京左京六条一坊十六坪・奈良市柏木町

埋蔵文化財センターから西へ約300mのところ、大規模店舗建設が計画され、事前に発掘調査を行ないました。その結果、奈良時代の多くの掘立柱建物・塀、井戸のほか、周囲の道路が見つかりました。奈良時代の建物は、遺構の重複関係から、3回以上の建て替えが見られます。

このうち、井戸のひとつから神功開寶（初鑄765年）の鑄型とその鑄放し銭（鑄型からはずしたままの未整形の銭）が発見されました。鑄型の全形は不明ですが、残る破片から厚さ1cmほどの粘土板の上に厚さ0.5cm前後の真土（粘土に細かい砂をまぜたもの）を重ねた「焼型」であることが考えられます。また、鑄放し銭は字体がいずれも異なっています。なかには、湯（溶かした銅）が銭範内の途中までしかまわらず、形が不完全なものがあります。また、字の一部がつぶれていたり、鑄型が割れてそこに余分な鑄張りがついていたりといずれも失敗品です。これらは奈良時代の末頃に井戸の木枠を抜き取ってから埋め戻した土の中に混ざっていたもので、このほかに、以下のような鑄造関係の遺物が出土しています。鑄棹、これには左右段違いに切られた浅い堰（銭範につながる溝）が残っています。原料の銅を溶かすための坩堝、炉に差し込んで空気を送るために輪の先につけた羽口、炉壁、銅滓（銅を溶かした時にできたかす）、飴状にとけた銅滓が付いた瓦、これははっきりとした用途はわかりませんが、丸瓦を縦半分に割ったもので、風よけなどに立てて使われたと考えられます。それから木炭があります。炉の遺構は残っていませんでしたが、十六坪内に神功開寶の鑄造を行なった工房があったと推定されます。古代に発行された皇朝十二銭のうち、鑄型や鑄放し銭が見つまっているのは和同開珎（初鑄708年）のみで、今回はじめて発見された神功開寶の鑄型は、貨幣鑄造の歴史を考える上で貴重なものです。



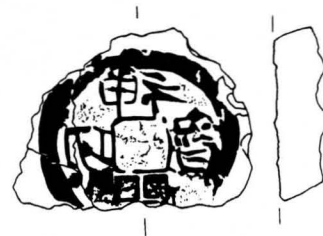
調査位置図



左京六条一坊十六坪遺構概念図

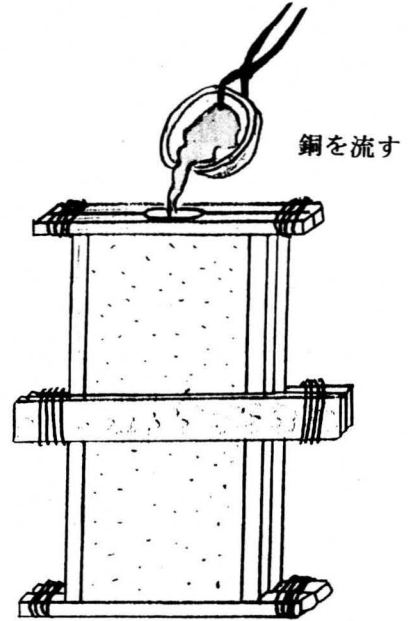
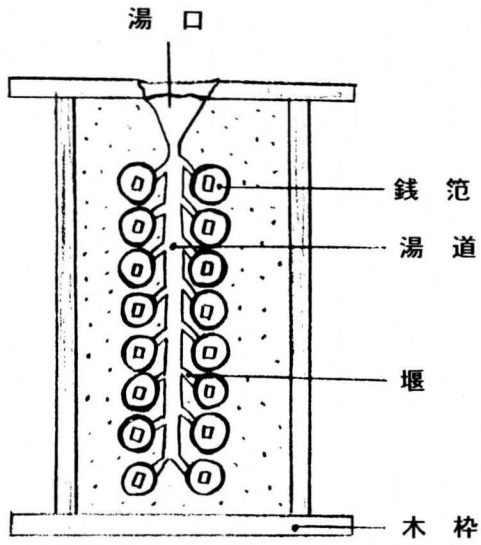


神功開寶 1/1

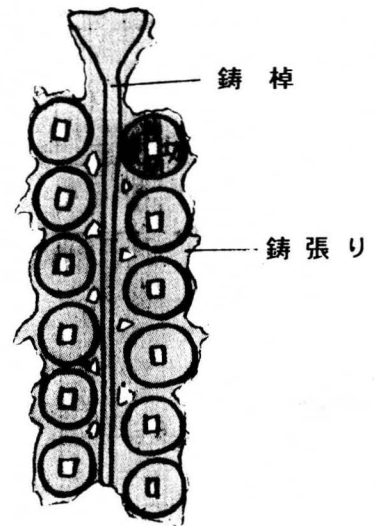
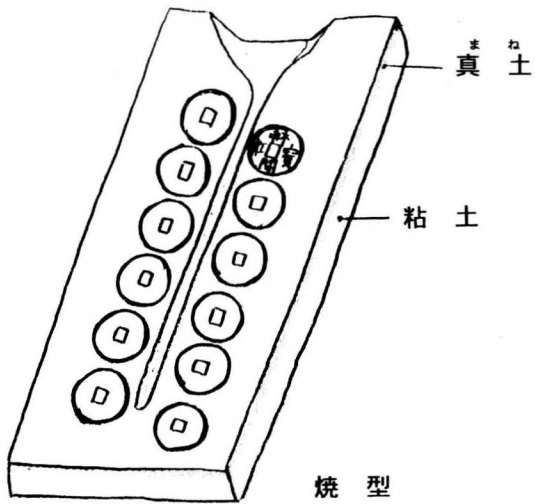


神功開寶の鑄型 1/1

・ 鑄型（錢範）の名称



・ 鑄上がりの復原と名称



・ 炉の復原と名称

